

飯盛山に白虎隊を弔う

白鳥省吾

松声颯颯として忠魂を弔う

溪水涓涓として古今を洗う

日月炳乎勝敗の外

錦風地に満ちて吟心を照す

【作者】白鳥省吾(一八九〇〜一九七八年)明治二十三年〜昭和四十八年)大正昭和時代の詩人。宮城県栗原市築館で生まれる。中学校四年生頃から詩を書くようになる。

早稲田大学に入学、後、「夜の遊歩」などの詩を収めた詩集『世界の一人』を若山牧水、太田水穂、前田夕暮の仲介で自費出版し、詩人として文壇にデビューを果たす。

『世界の一人』は好評を博し一躍名声を高める。早稲田大学卒業後、『新少年』『露西亜評論』など、戦前に栄華を極めた雑誌の編集を担当し、詩人の団体「詩話会」の

発行する『日本詩集』や、「詩話会」の発行する『日本詩人』の編集委員も歴任する。また、『日本社会詩人詩集』を福田正夫、賀川豊彦、加藤一夫、百田宗治、富田碎花

と共に著、『泰西社会詩人詩集』を福田、百田、富田と共に編訳し、省吾と共に福田・百田・富田の「人が「民衆派詩人」と呼ばれる契機にもなった。一方で、靖国神社の遊就館

をうたった「殺戮の殿堂」は日本を代表する反戦詩として注目を集めた。晩年は千葉県に居住を構え、亡くなるまで和洋女子大学の教授を勤めていた。音頭、社歌、小

唄、民謡、歌謡を多数作詞した他、校歌の作詞でも知られ、その数は日本全国で二〇〇校を超える。詩集、評論集、随筆等著書も数多く、日本全国に建立された文学

碑も三十基を超える。一九七三年逝去。享年八十三歳

【語釈】*颯颯…風のさつと吹くさま。 *溪水…谷間の水。谷川。 *涓涓…水が細く流れるさま。

*古今…昔から今に至るまで。 *柄乎…輝き明らかさま。 *錦風…秋風。 *吟心…詩歌を作る心。詩情。

【通釈】「こ飯盛山に来てみてば、さわやかな松風が吹き渡り、あたかも白虎隊の忠魂を弔っているかのようである。又、谷川の水もさらさらと流れて、その清らかな流れは、時の移り変りを洗い清めているかのようでもある。思えば十六、七歳の若者が、主君の為に戦い、遂に力尽きて、こ飯盛山で壮烈な自刃を遂げた(時は移っても、勝敗を越えた)この少年たちの忠勇義烈の行動は、後の世までも輝きを放ち、その歴史を語るかのよう、今、秋風が地上に満ちて、しきりに吟心を呼び起すのである。